

木村先生のブルガリア訪問同行記

佐藤 純一

木村彰一先生は、亡くなる前年の 1985 年 5 月に、ブルガリア科学アカデミーの招待でメソディオス没後 1100 年記念の国際学会に参加された。このブルガリア訪問については先生ご自身が三省堂の広報誌『ブックレット』№ 58 (1985 年 9 月) にその始終を「ソフィア日記」と題して寄稿された (pp.4-9) ので、ご存じの向きも多いと思う。先生のこの最初にして最後のブルガリア訪問にたまたま同行の幸運に与かった者として、その経緯や現地での先生のご様子などを思い出すまま述べたい。なお、本稿では、公刊の著作物のタイトルの引用の場合以外は、キリロス、メソディオス、スラヴ、古教会スラヴ語、古ブルガリア語、古ロシア語などの表記を用いることをあらかじめお断りしておく。

1975 年 1 月、先生を主編者とする我々の『博友社ロシア語辞典』が十数年を費やしてようやく出版されてからは、夏休みを自由に使えるようになり、私は早速その夏はソフィア大学主催のブルガリア研究夏季セミナーに参加して、ブルガリアやロシア・東欧・欧米諸国の専門家たちと知り合う機会を得た。その後もこのセミナーに頻繁に参加して、機会あるごとに木村先生を中心とする日本のスラヴ研究の状況をまとめて報告していた。

木村先生は 1975 年 3 月に東大を定年で退官され、4 月からは早大文学部の教授として、更に幅広くロシア・スラヴ研究の後進たちの指導育成に当たられていた。日本のスラヴ研究は木村先生の主導によって戦後ようやく確立・発展の道を辿り始め、弟子の第一世代である我々は国際的な連携の必要を痛感するようになっていた。それで木村先生を会長とする日本スラヴィスト協会を立ち上げて、1978 年 9 月の第 8 回国際スラヴィスト会議 (於ザグレブ) には木村先生ほか 10 人近くがオブザーバーとして参加して、国際スラヴィスト委員会に日本の正式加盟を申請し、満場一致で認められた経緯がある。

その後 1981 年に建国 1300 年を迎えたブルガリアでは、5 月にそれを記念する大規模な国際学会が開催された。オスマン・トルコ研究の護雅夫東大教授やビザンチン研究の尚樹啓太郎東海大教授ほか数人の日本代表団が参加して注目を集めたが、松永緑弥、小船井文司、森安達也の諸氏や私もその一員であった。そしてこの年の秋にはブルガリアから高名な古ブルガリア語文献研究者で旧知のクーエフ教授 (Куйо Кувев, 1909-91) とボゴミール派異端の歴史の著書で知られるアカデミー会員のアンゲロフ教授 (Димитър Ангелов, 1917-96) が、当時緊密な関係にあった東海大学の招きで来日されたので、私もお二人を歓迎する小宴を設けて木村先生と千野栄一氏を紹介することが出来た。

また、1983年9月の第9回国際スラヴィスト会議（於キエフ）には、初めて正式参加を認められた日本から米川哲夫、福岡星児（北大）の両先輩を始めとする20人近くが参加して9人が研究発表を行い、日本のスラヴ研究の実力を知らせる機会となった。ただし、木村先生が都合で同行されなかったのは、残念至極としか言いようがない。

そしてもっと大事なことを付け加えれば、1983年には木村先生はすでに岩井憲幸氏とともに「コンスタンティノス一代記 一訳ならびに注一」の準備に着手されていたはずで、その成果は北大の『スラヴ研究』31号（1984）と32号（1985）の2冊にわたって連載されている。しかも先生の急逝直後の86年3月発行の同誌33号にはそれに続く「メソディオス一代記 一訳ならびに注一」が掲載されているのである。すなわちこの執筆の時期は先生のブルガリア訪問の前後にわたっており、先生のブルガリア訪問を促す動機の一つであったと考えられる。

こうした経緯の中で、ブルガリア科学アカデミーから私のもとに、メソディオス顕彰の国際学会に木村先生と私を招待したいとの打診があったのは、1985年2月末のことだった。この年の2月初めには、先生の『古代教会スラブ語入門』の出版祝賀会が盛大に催されたばかりだったが、ご都合を伺うと、3月で早稲田大学が定年退職になるので、時間はたっぷりあるだろうから喜んで行きたいが、研究発表は遠慮するとのことだった。

先方にそのように連絡すると、もちろんオーケーで、やがて旅程表と航空券が届いた。旅程は5月19日成田発から同29日成田着までの10日間で、往路はアリタリア航空で19日17時45分成田発、翌20日朝ローマ着、夕方のブルガリア航空の便でソフィアに向かい、夜8時前に到着してホテルに入る予定となっていた。この南回りの旅は私にとっても初めてである上に、なんと一等席で、ローマに半日滞在できるのも楽しみだった。

やがて出発の日となり、木村先生とは成田で待ち合わせて、機内に乗り込むと、一等席は機首部分の一郭で、左右の窓際に2列ずつの、エコノミークラスとは段違いの余裕のある間取りだった。豪勢な夕食と選り取り見取りのワインやブランドーのサービスを先生と二人で堪能したのは勿論である。

ローマに着いたのは現地時間の朝7時25分で、休息用に予約されていたホテルにはタクシーで30分ほどだった。これまた Parco dei Medici という大ホテルで、部屋で一息入れてから食堂で昼食をとり、夕方までの予定をご相談すると、先生は直ちに、ローマは初めてなので Via Appia と Foro Romano を見てみたいと言われた。

それでフロントに英語の分かる運転手のタクシーを呼んでくれるように頼み、すぐやって来た運転手にこちらの意図を知らせると、二つ返事で、まず郊外のアッピア街道の由緒ありげなところへ案内してくれた。車を降りて暫くあたりを散歩したが、古代ローマ史のいろいろな場面に出てくるこの街道の風景に触れて、先生はとても感慨深げなご様子だった。車に戻り、市内中心部のフォロ・ロマーノに向かった。ここでは一面に広がる発掘さ

れた廃墟の数々に接して、先生とともにまた特別の思いに浸った。当初の2時間の予定がまだたっぷりあったので、運転手の勧めでコロッセオに寄って一覽し、ホテルに戻った。

支度をして再びタクシーで空港へ行き、16時25分発のブルガリア航空機でソフィアに向かい現地時間19時40分に到着した。本来の時差とブルガリアの夏時間との差し引きで、実際にも3時間程の空の旅だったように思う。空港には科学アカデミーの手配で通訳の女性が迎えに来ていて、すぐ車で宿泊先のグランドホテル・ソフィアに案内してくれた。隣り合った個室を用意しておいてくれたので、我々は旅装を解き、食堂で無事安着の祝杯を上げ、夕食を楽しんだ。

これから先のブルガリア滞在中の主な行事や出来事は木村先生の「ソフィア日記」の通りなのだが、初めてという方々のため、要点を記しておきたい。

「スラヴ人の啓蒙者」という敬称で呼ばれる聖人キリロス・メソディオス兄弟については多言を要しないと思うが、キリロス（コンスタンティノス）の死後もモラヴィアで正教会の伝道に努めた兄のメソディオスは885年に没している。我々が招かれたのは、その1100年記念行事の一つとして、ブルガリア科学アカデミーのキリロス・メソディオス学術センターとブルガリア語研究所が共催する国際学会で、5月21～23日の三日間にわたり内外のブルガリア研究の専門家約300名を集めて盛大に行われた。21日は、ホテルから歩いて15分程のソフィア大学の本館正面の2階大広間で行われた開会式のあと、昼食のための休憩を挟んで午後からは研究発表が別の講義室で行われた。

ところが開会式で配布されたプログラムには、事前のこちらからの連絡にも関わらず、翌日の午後に木村先生の発表があるように記されていたので、事務局に削除を申し入れたが、先方の希望もあり、木村先生がブルガリア人学者と二人で司会を担当し、最初に先生が挨拶のスピーチをなさることで了承を得られたのは幸いであった。

翌22日午前には、私がロシア語で「Новое в староболгаристике в Японии」と題する発表を行ったが、木村先生も聞いて下さった。その内容は上述の木村先生の『古代教会スラヴ語入門』や『コンスタンティノス一代記 一訳ならびに注一』を含む最近30年の日本人学者による古ブルガリア研究関連の業績31点を一覧表に示して、その内容と意義の解説を試みたものである。その全文は幸いにしてキリロス・メソディオス学術センターの紀要「Кирило-Методиевски студии」の4号（1987）に掲載されている（pp. 482-485）。

同日午後の発表会では、まず共同司会者のパヴロヴァ教授が木村先生を紹介し、続いて木村先生がご自身のスラヴ研究との関わりについてかなり詳しくお話しになり、今回の国際学会への招待に感謝を述べられるとともに、キリロス・メソディオス学術センターへの寄贈のため用意された『古代教会スラヴ語入門』2冊をパヴロヴァ教授に手渡されて、満場の拍手喝采を浴びる一幕もあった。木村先生は司会者席に着かれ、英語の発表数件の司会を担当されて、責任を十分に果たされた。夜は科学アカデミー総裁主宰のレセプション

が我々のホテルで開催され、先生と私も各国の学者との交流を大いに楽しんだ。

翌 23 日は学会の最終日で、午前と午後に研究発表会があったが、木村先生はその時間を通訳の女性の案内でソフィア市内の観光に当てて、十分に楽しまれた様子だった。夕方 6 時から同じ本館正面の 2 階大広間で行われた閉会式には先生も列席されたが、終幕を飾る合唱団の中世ブルガリア聖歌の美しい演奏は参列者の賞賛を集めた。

その後で先生とホテルの前のカフェで一杯やっていると、前触れもなしにブルガリア広報センターの次長と名乗る未知の若い紳士が現れて、我々を夕食に招待したいとのことで、当時出来たばかりのホテル・ヴィトシャに車で案内された。これは日本のホテル・ニュー大谷との合弁事業で、かねがねその評判は耳にしていたが、私も初めて見る大ホテルだった。この紳士はハーヴァード大学に留学したとのことで、ハーヴァードにご縁のある木村先生と大いに話しが弾んだが、予期せぬおまけと言えよう。

翌日の 5 月 24 日は「ブルガリアの啓蒙と文化、スラヴ文字記念の日」という国家の祝日で、1878 年のブルガリア独立回復以来、キリロス・メソディオス兄弟の事蹟を讃える様々な催しが行われて来た。今回の国際学会がこの日に合わせて開かれたのは当然である。モスクワのレーニン廟のようなディミトロフ廟の前の広場でいろいろな団体のパレードがあり、学会参加者は招待されて貴賓席から見物した。木村先生は、そこで顔を合わせたパヴロヴァ女史との会話を、『『 Kommunismus とキリスト教の平和な共存ですね』と感想を述べたら、女史は『その〈平和な〉というのが大事なのです』とひとこと言って微笑した』と記されている（『ソフィア日記』 p.8）。

パレードの後、我々は 4 年前に建国 1300 年を記念して建設された「エンデカー」（НДК）と略称される国民文化宮殿に車で案内されて、学会参加者のための盛大なレセプションに列席した。そしてその夜は木村先生も一緒に 75 年以来旧知の文芸評論家キリル・ポポフ夫妻の自宅に招かれて、心づくしの夕食とともに歓談のひと時を過ごした。

翌 25 日は学会のエクスカージョンで、朝からバスを連ねてトラキア平原の中心都市プロヴディフを訪れ観光と昼食の後、ロドピ山脈北側の山中にある国内最古級のバチコヴォ修道院を見学した。ソフィアに夕方帰着する長旅だったが、先生は終始お元気だった。

翌 26 日は帰国前の最後の自由な一日だったので、私がソフィア大学の知り合いに頼んで車を出してもらい、ソフィアの南 120 キロのリラ修道院に木村先生をご案内することにしていたが、学会で再会した先生旧知のソルボンヌのボナムール教授もお誘いして、3 人での道行きとなった。ブルガリア正教会で最も由緒のあるこの修道院をゆっくり見ながら、また、往復の車中でもお二人が会話を楽しまれた様子を嬉しく思い出す。その夜はキリルの兄のロシア文学者コンスタンティン・ポポフ夫妻の自宅に木村先生、ボナムール氏とともに招かれ、一昨夜と同様に楽しく時を過ごした。

そして 5 月 27 日ついにブルガリア出発の日が来て、世話になったポポフ兄弟夫妻をホ

テルに招いて昼食を共にしたのち、ブルガリア航空の 15 時発の便でソフィアに別れを告げて、ローマに向かった。現地時間 16 時 10 分ローマ着、同じ Parco dei Medici ホテルに泊まったが、さすがに先生もお疲れの様子なので外出はせず、食堂で夕食の後は自室にお引取り頂いた。翌 28 日は朝食のあとホテルを出て空港へ行き、空港で土産物をいくつか整えて、12 時 40 分発のアリタリア航空機で日本への最終の帰途に就いた。そして翌 29 日の 14 時 45 分成田に着いて、先生とご一緒の長旅を無事に終えた次第であった。

Проф. Кимура при Посещении Болгарии — Воспоминания сопровождаителя —

САТО Дзюн-ити

В мае 1985 года по приглашению Болгарской Академии Наук Проф. Кимура в первый раз посетил Болгарию и участвовал в Международном конгрессе болгаристов, посвящённом 1100-летию Св. Мефодия в Софии. В качестве сопровождаителя поездки хочу передать коллегам то, что я вспоминаю о нашем совместном пребывании в Болгарии, осуществившемся еле семь месяцев раньше смерти дорогого Профессора.